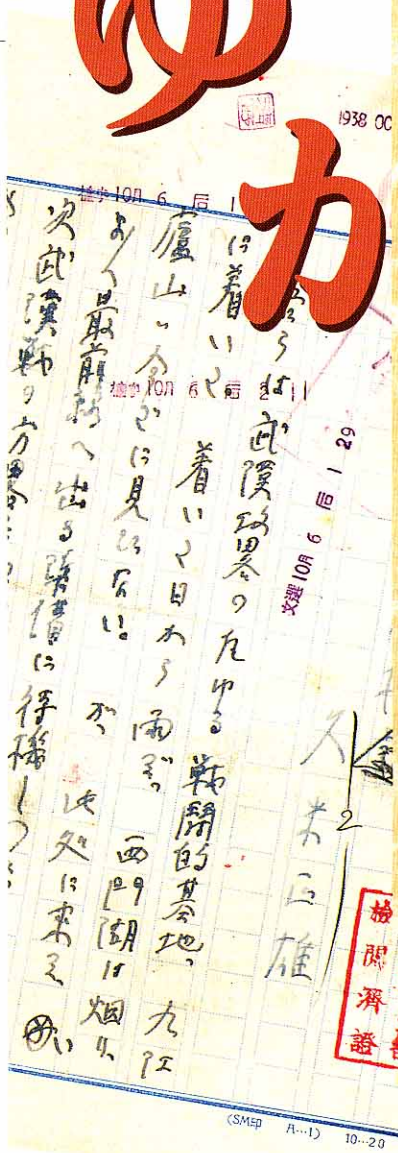
ふくしまゆかりの文学者たち



高山樗牛（たかやま・ちょぎゅう）

明治四・一・一〇～明治三五・一二・二四、本名林次郎、山形荘内斎藤親信の二男。伯父高山久平の養子。久平は県令三島通庸に従って県庁勤務、福島西裏五丁目小倉長屋第六号に住む。福島中学校（現安積高校）在学中父の転任で上京。『美的生活を論ず』等の作品がある。

小林美代子（こばやし・みよこ）

大正六・三・一九～昭和四八・八・一八、岩手県生。保原高等小学校を一年で中退。自己の精神病院での体験に基づく『髪の花』で群像新人文学賞を受賞。人間の心の弱さの中にある生の意味を描く作家として、期待されていた。

服部撫松（はっとり・ぶしょう）

天保一二・一・一五～明治四一・八・一五、二本松生。二本松藩の儒者で、戊辰の役後、東京に出て、戯作をはじめ多くの雑誌などを発刊した。

久米正雄（くめ・まさお）

明治二四・一・一・二三～昭和二七・三・一、長野県生。父の自殺で母の実家郡山で育った。『三浦製糸場主』『牧場の兄弟』『破船』『父の死』や若松・猪苗代湖が舞台となった『受験生の手記』等がある。

3 滝口入道

小説　高山樗牛　明治二八年（一八九五）

読売新聞の懸賞小説二等に入選。一等なく新聞に一八九四年（明27）四月から二三回掲載された。匿名発表で作者は帝大（現東大）学生某氏となっていたので話題となる。『平家物語』を材料として美文調の擬古典体の哀感的作品。主人公の斎藤滝口時頼と横笛の悲恋の物語。主人公時頼は「是の時二十三、性闊達にして身の丈六尺に近く、筋骨飽くまで逞しく、早く母に別れ、武骨一辺の父の膝下に養はれしかば、朝夕耳にせしものは名ある武士が先陣抜懸けの誉ある功名談」の中で育った。この時頼が年令一六の「緑の黒髪後にゆりかけ」「閑雅に臈長け」た横笛に激しく恋心を持つが結ばれず仏門に入り滝口入道となる。横笛も尼となり病死する。

24 繭となった女

小説　小林美代子　昭和四七年（一九七二）

孤独のうちに小林美代子はアパートの一室で、ひっそり自らの命を絶った。その前年に、今までの人生を回想しつつまとめたのがこの小説。小学生の克美（美代子がモデル）の家は岩手県釜石でお茶屋を経営していたが、ある事情で父母の故郷伊達郡保原町へ引っ越して来た。しかし、その日が一家の不幸と没落の始まりであった。「七夕の朝、明けぬうちに阿武隈川で髪を洗うと、乙女は美しくなると言われていた……水を手で幾度も掬っては根元に掛ける。朝の冷気の中で水はしっとりと頭にまつわる」。悲惨な境遇の少女克美を、福島の清冽な自然はそっと優しくつつむ。

27 東京新繁昌記

戯作　服部撫松　明治七年（一八七四）

文明開化の波に洗われつつある明治初年の東京を「学校」「新聞社」「牛肉店」などの項目にわけて紹介したもの。内容は会話のなかで、ふざけ、おどけなどを縦横に駆使して物語風とし戯作の妙味を出す一方、痛烈な社会批判を試みた。当時の有名出版社・山城屋から出版、一万部以上の大ベストセラーとなった。

35 阿武隈心中

戯曲　久米正雄　大正五年（一九一六）

三幕物戯曲。場所は「東北地方の或る農村」阿武隈川の瀬鳴りの聞こえる阿久津留蔵の家は、現郡山市阿久津。農村の「一里ほど離れた町の、紡績の汽笛が鳴る」と背景に描かれたのは、郡山の紡績工場や煙草専売所といった近代産業、若者は農業を嫌って都会に出て行く。作男の久作が「ほんとの百姓ってもんは、おら等が代でお終ひだんべ」と言う。留蔵の次男留二が「おれが立派な百姓になって見せる」と応えるが、久作は「時世には勝てねえ」と言う。長男の留吉が東京から帰って来て、家を抵当に株で失敗した穴うめをしようとする。ことわられ阿武隈川に投身自殺。恋人お豊もあとを追う。叔父猪八も酒に酔い川に落ち死ぬ。久作は「これも時世のせゐだんべ。此頃のやうに軋み合っては、生きてられねえ」と言った。近代化の中で没落する農村悲劇。

36 貧しき人々の群・禰宜様宮田

小説　宮本百合子　大正五年（一九一六）大正六年（一九一七）

『貧しき人々の群』は安積開拓の中心地である開成山を舞台とした農村を描いた作品。作者の祖父中條政恒は安積開拓の指導者であり、今日の郡山の基礎を作った人物である。開成山もその座右の銘「開物成務」から。その祖父の事業を生み出した矛盾に気づき、貧しい者のない社会を希求する主人公の「どうぞ憎まないでおくれ。私はきっと今に何か捕へる。どんなに小さいものでもお互に喜ぶことの出来るものを見つける。どうぞそれまで待っておくれ」という叫びは、百合子文学の生涯を貫く思想となった。百合子一七歳の作『中央公論』発表。この作執筆の一九一六年、開成山に住む祖母と飯坂温泉に遊び、飯坂の風景を背景にして、郡山の没落農民の姿を禰宜様宮田

宮本百合子（みやもと・ゆりこ）
明治三二・二・一三～昭和二六・一・二一、東京生。父は著名な建築家、夫は顕治。プロレタリア文学、民主主義文学の先頭に立つ。『三郎爺』『伸子』『播州平野』『道標』等。

水野仙子（みずの・せんこ）
明治二一・一二・三～大正八・五・三一、本名服部テイ、須賀川の酒人服部直太郎の三女に生。兄は歌人、国文学者として活躍した服部躬治（もとはる）。姉ケサは日本最初の癩病院を設立した医師。三兄妹は福島県の生んだ近代の代表的知識人たちである。躬治には歌集『迦具土（かぐつち）』（明34）があり、「迦具土のその血たばしれ人の世の湯津磐村（ゆついはむら）は苔むしにけり」と詠んだ。『嘘をつく日』『従芳』『神楽坂の半襟』等。

東海散士（とうかい・さんし）
嘉永五・二・二～大正一・一・九・二五、本名柴四朗。会津藩士柴佐多蔵の四男。安房（千葉県）富津の会津藩陣屋生。藩校日新館に学ぶ。鳥羽伏見の戦いに参加。戊辰戦争に参加して敗北し北斗南移住。弟柴五郎と西南戦争に参加。柴五郎はのち陸軍大将となる。伝記的作品『ある明治人の記録』石光真人編著がある。

若松賤子（わかまつ・しずこ）
元治元・二・一～明治二九・一二・一〇、会津若松生。フェリス女学院の前身校に学び、後に同校の教師となり巌本善治と結婚。キリスト教の精神に徹した翻訳や創作、評論に筆をふるった。会津若松の生家跡には賤子の言葉を刻んだ碑が建つ。

横光利一（よこみつ・りいち）
明治三二・三・一七～昭和二二・一二・三〇、北会津郡東山温泉生。本名利一（としかず）父が土木請負業でこの地に滞在し誕生の地となる。本籍、大分県。『旅愁』『機械』『上海』等の作品がある。

と綽名される主人公を通して描き出した。『貧しき人々の群』の姉妹編とも言うべき作品で共に農民と農村の悲劇を主題にしている。

43 酔ひたる商人

水野仙子

小説　大正八年（一九一九）

仙子の絶筆作品『酔ひたる商人』は自然主義文学でも優れた短編の一つとされる。「東北のある小さな一町民なる綿屋幸吉は、今朝起きぬけに例の郡男爵から迎への手紙を受け取り」り、停車場近くの青鸞亭という料理屋へ出かける。須賀川を舞台としたこの作品は、酒好きの主人公の幸吉が男爵と飲んだあと本家に行き、次第に酔ってくだをまき、商売に苦労する自分に対し「感傷的に、自分に向ってあらゆる悪口を並べたてた」あと、さめざめと泣き出す姿が描き出され、庶民の人生の悲しみを表現している。

54 佳人之奇遇（かじんのきぐう）

東海散士

小説　明治一八（一八八五）

八編巻一六から成る長編作品。近代日本文学史で政治小説と呼ばれる。明治開化期の民族の独立と自由民権思想を鼓舞する作品で、主人公は東海散士自身。散士が『費府（ヒラデルヒヤ）ノ独立閣（インデペンデントホール）ニ登リ、仰テ自由ノ破鐘』を見たり「米国ノ独立」宣言を読み感激していると、二人の美女が独立閣に登って来る。一人は「西班牙（スペイン）」の幽蘭と、「愛蘭（アイルランド）」の紅蓮（コーレン）という二佳人。二人は独立解放運動の女性闘士で散士と意気投合した。この美女たちへのあわい恋心や別離を物語の縦糸に舞台が全世界に広がり、政治論を横糸に展開する叙事的作品である。

55 小公子

若松賤子

翻訳　明治二三年（一八九〇）

英国のお城にある日突然、跡継ぎとして迎えられた純真可憐なセドリック少年は、孤独で偏屈な老侯爵の心を和ませて、ついに優しい心に変えてしまう。「セドリックには、誰も云ふて聞かせる人が有ませんかツたから、何も知らないでゐたのでした」という書き出しに端的に示されるように、言文一致の文体の開拓者でもあった。賤子の独特な雅趣に富んだ名訳は日本児童文芸史上、不滅の光芒を曳く。原作はアメリカの女流作家バーネットの家庭小説。

57 蠅

横光利一

小説　大正一二年（一九二三）

「真夏の宿場は空虚であった。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩（うまや）の隅の蜘蛛の網にひっかかると、後肢（あとあし）で網を跳ねつつしばらくぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぽたりと落（おつ）った。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている藁の端から、裸体にされた馬の背中まで這い上がった」。この馬は猫背の老いた馭者の乗合い馬車を引き、乗客に街で息子が危篤の電報を受けとった農婦や、駆落（かけ）ちする若者と娘、母親に手を曳かれた男の子、四十三歳で三十三年間貧困と戦ってようやく春蚕（はるご）の仲買で大金を手にした田舎紳士たちを乗せて宿場を出発するが、高い崖路から車輪を外して、人馬もろとも河原に墜落して行く。この光景を大きな眼に映した蠅は青空高く飛び上る。新感覚派らしい作品。

後藤宙外（ごとう・ちゅうがい）
慶応二・一二・二三～昭和一三・六・一二、秋田県生。田園生活実行のために明治三四年から明治四〇年まで、福島県北会津郡湊村大字赤井戸の口（猪苗代湖西岸）に居住、終焉の地としても同じ場所を選んだ。

志賀直哉（しが・なおや）
明治一六・二・二〇～昭和四六・一〇・二一、宮城県生。白樺派の代表的作家で、小説の神様といわれた。相馬のことを書いた随筆に『稲村雑談』（昭23、24）、『少年の日の憶ひ出』（昭34）などがあり、ともに祖父が関わった相馬事件にもふれている。

荒　正人（あら・まさひと）
大正一・一・一～昭和五四・六・九、相馬郡鹿島町生。本籍地は同郡中村町（現・相馬市）。教師の父の任地が転々としたので幼少時は千葉、山形、長野、鳥取県で生活。評論集『負け犬』『市民文学論』『宇宙文明論』等。

加藤楸邨（かとう・しゅうそん）
明治三八・五・二六～平成五・七・三、東京生。昭和七年、水原秋桜子の弟子となり指導を受ける。昭和一四年に第一句集『寒雷』を刊行、翌年には俳句雑誌『寒雷』を創刊した。

島尾敏雄（しまお・としお）
大正六・四・一八～昭和六一・一一・一二、横浜市生。本籍は相馬郡小高町で父母はそこの出身。愛妻との葛藤を私小説風に綴った代表作『死の棘』の第五章『流棄』や、自伝的エッセイ『忘却の底から』などでも小高を描いている。

---

69 会津節

後藤宙外
小説　明治三六年（一九〇三）

押切川に沿う熱塩村の湯治場には、豪農の娘でありながら一七歳で家出をし、今では馬追いとなって皆に自慢のノドを聞かす阿吉（四二、三歳）がいた。

ある日、夫のところに、地元出身で東京で出世している友人長谷山が訪ねて来る。長谷山は戊辰の役で妻や老母を殺した深い悲しみを語り帰京するが、阿吉は彼の前で悲しい会津節を美声でうたうのであった。

この小説には、宙外の、戊辰戦争の悲劇に対する共感や、会津の人々へよせる暖かい心情がよく表されている。他に小説「獨行」（明41）でも宙外は福島県南部から北部を描いている。

79 祖父

志賀直哉
小説　昭和三一年（一九五六）

旧藩主相馬子爵の家令であった祖父志賀直道は、明治三九年に八〇歳で死去した。

直哉は東京の相馬藩邸の一角に住む祖父母のもとで育てられ、維新後の藩の対応や相馬事件等に関わった祖父の姿を間近に見ている。

この小説はその祖父の五〇回忌にあたって、その姿や人柄を、日記、書簡、思い出、父からの伝聞等を駆使し実証的、文学的に描出している。

81 第二の青春

荒　正人
評論　昭和二一年（一九四六）

「絶望を知り、深淵をくぐり、虚無の世界をかいまみたわたしたち三十代は、そのゆえにこそかえって、この人生をいっそういとおしむことができるのである」。太平洋戦争が日本の敗北によって終わった。米軍を中心とした連合国軍が日本を占領し、米国式の民主主義が戦前、戦中の軍国主義にかわって政治や国民生活に推し進められた。敗戦前の暗く自我の抑圧された暗い時代を過ごさねばならなかった二〇代を「第一の青春」とし、戦後の民主主義の主張される時代を迎えた三〇代を「第二の青春」だと荒正人は呼んだ。この評論は第二次大戦後の日本の文学や思想界をリードした雑誌『近代文学』第二号（昭21）に発表。「世代」論争を巻き起こした。

84 まぼろしの鹿

加藤楸邨
俳句　昭和四二年（一九六七）

吾妻嶺がここに噴く湯ぞほととぎす

この句を含め、一八句を「吾妻の夏」として載せている。人間探求派とよばれて来た楸邨の第一〇句集で昭和二八年から四一年までに制作の句を集成している。句集題は良寛の句に刺激されたもの。楸邨は昭和二八年七月に福島、土湯、裏磐梯を旅行している。

彼は一〇歳のとき、父が原ノ町駅長となったので原町小学校に転校して来、一三歳で卒業するまでを福島ですごしている。

85 いなかぶり

島尾敏雄
小説　昭和二六年（一九五一）

思無邪（シムヤ）は、おばあさんのたくさんの孫のなかでいちばんかわいがられていた。満ち潮の海辺で二人は波にさらわれそうになる。「波はどんどんふくれ上って来た……そこは、はたてであった。小さな丘が海の真上でぶち切れていた。丘の鼻は日に日に風雨や波濤に蚕食（さんしょく）され、真新しい崖肌をあらわにして、そそけだっていた」。白昼夢のように危機はあっけなく去るが、思無邪の心のなかにその時の恐怖感は、少年の日の原体験として深く刻み込まれた。そして、村の少女おキイとの不器用な性の目覚め。毎年夏休みを海のある小高町の祖母の家で過ごした作者の追憶が、青い走馬灯のように投影した小品。

86 死霊

埴谷雄高
小説　昭和二一年（一九四六）

「三輪與志が郊外にある××風癩病院を数度にわたって訪れなければならなくなった用件と云ふのは、彼の嘗ての親友で、またその後、兄の知人ともなったらしい或る不幸な、孤独な精神病者の委託についてであった」。

小説の冒頭に登場する青年與志は、黙狂で刑務所からこの病院に移された矢場徹吾を訪ねて来た。與志の兄三輪高志は秘密にみちた人物、その友人で「首ったけ」と自称する首猛夫が矢場と同じ刑務所から出て来た第一日目の午前から夕方までの中を、延引と続く未完の長編小説。戦後文学を代表する最大の思想的観念小説で、昭和二一年雑誌『近代文学』に発表。第八回日本文学大賞受賞。

87 近代文学論争

臼井吉見
評論　昭和二九年（一九五四）～昭和三二年（一九五七）

明治以来の日本における文学をめぐる代表的論争を紹介しながら論評した著作。特に文学論争という特異な世界を扱ったものとしては、戦後文学中の嚆矢（こうし）的な仕事といわれる。昭和二九年雑誌『文学界』一月号から昭和三二年一二月号まで四〇回連載。第一回「逍遥論争」から第一四回「形式主義文学論争」までが『近代文学論争・上』として刊行、版を重ね絶版。下巻は未刊のまま昭和五〇年に上・下合わせて筑摩叢書として再新発刊された。著者は戦後の名編集者として活躍、多くの新人作家を発掘した。

98 たった二人の工場から

真尾悦子
手記　昭和三十四年（一九五九）

氾濫社は社員がたった二人の印刷兼出版社であった。真尾悦子とその夫で詩人の倍弘（まさひろ）は極端な貧困と病弱な身体にも屈せず力を合わせて「月刊いわき」を発行、いわき地方に小さな文化の灯を点し続けた。詩人三野混沌や会計さんこと諸橋元三郎たちも登場する。「石造り

埴谷雄高（はにや・ゆたか）
明治四三・一・一～本名般若豊。台湾生。祖父は相馬藩士。本籍は相馬郡小高町岡田字山田。明治維新後、祖父は上着農業を営むが没落。そのため父が台湾で製糖社員として働き抵当に入った相馬の田畑を取りもどしたが、雄高の代で手放した。『闇のなかの黒い馬』『幻視のなかの政治』等

臼井吉見（うすい・よしみ）
明治三八・六・一七～昭和六二・七・一二、長野県生。東大国文科卒後の昭和六年から十年まで県立双葉中学校の国語教師として勤務、新婚生活もここで過ごした。臼井が第二の故郷と呼ぶほど愛着の土地となった。双葉町図書館に「臼井吉見コーナー」がある。東京へ出てからは雑誌編集者、文芸評論家、小説家として才能を開花させた。評論『人間と文学』『戦後』『蛙のうた』小説『安曇野』。

真尾悦子（ましお・えつこ）
大正八・一〇・一八～、東京生。昭和二四年から三七年まで、いわき市に在住。同地に題材を得た作品としては他に『旧城跡三十二番地』『地底の青春』等がある。

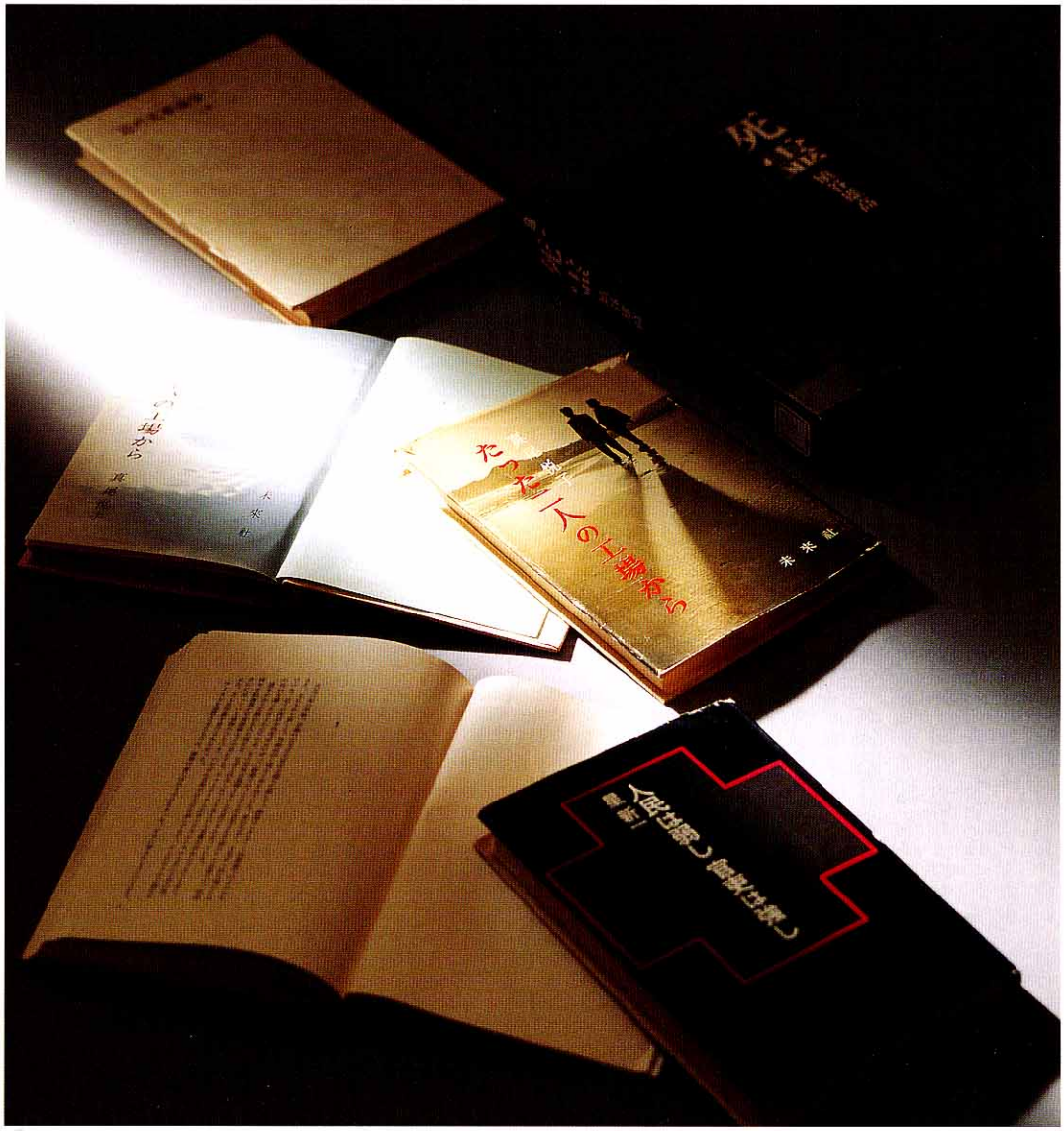
星　新一（ほし・しんいち）
大正一五・九・六～、本名親一。東京生。星一の長男で昭和四三年に日本推理作家協会賞を受賞したほか、ショート・ショート作家の第一人者である。

の倉庫に案内された。会計さんの、私設図書館、三猿文庫である。五万冊の蔵書がぎっしりと詰まっている中で、書籍の修理係の老婦人が一人、テーブルにむかって静かに糊をつかっていた」。

100 人民は弱し官吏は強し　星　新一

小説　昭和四二年（一九六七）

いわき市生まれの星一（ほしはじめ）は、アメリカ留学を終えて帰国すると三五歳で衆議院議員に当選した。次に明治三九年に創立した製薬会社は「クスリはホシ」の看板で、全国に販路を拡げた。大正期に入るとモルヒネ、コカインなどアルカロイド製薬にも成功したが、出る杭は打たれる。政党の対立もあって、官憲は執拗に妨害、阿片事件をでっち上げて星を有罪にしようとしたばかりか銀行にも圧力をかけた。事件は結局無罪になるが、会社の信用は大きく傷つき、刀折れ矢つきてしまう。星は決算株主総会で経過報告のあとこうつぶやいた。「人民は弱し官吏は強し」。星には、この前編ともいえる『明治・父・アメリカ』がある。これには祖父、父の人となりがいわきの風土の中に描かれている。



ふくしまの文学賞受賞者

●芥川賞●

故芥川龍之介を記念して昭和10年に創設され、無名もしくは新進小説家の登竜門として権威あるものとなっている。本県出身・ゆかりの受賞者と作品は次のとおり。

第４回（昭11下）富沢有為男
「地中海」東陽8月号
第７回（昭13下）中山義秀
「厚物咲」文学界4月号
第18回（昭19下）東野辺薫
「和紙」東北文学10月号
第106回（平４上）松村栄子
「至高聖所」海燕10月号
第111回（平６下）室井光広
「おどるでく」群像4月号

なお、芥川賞と同時に創設され、新進の大衆文芸作品を顕彰する直木賞には、残念ながら本県からの受賞者はいない。

●福島県文学賞●

昭和23年に創設されて以来、小説、詩、短歌、俳句の4部門において県内の優れた文芸作品を表彰しており、地方の文学賞としては全国でも有数の歴史を持っている。

この100選中の受賞者は次のとおり。

第１回（昭23）小説部門
河内潔士（川内康範）
「天中軒雲月」
第４回（昭26）小説部門
岩間芳樹「岩間芳樹ラジオドラマ選集」

また、歴代審査委員には、小説部門の富沢有為男、東野辺薫、荒正人、早乙女貢、岩間芳樹、詩部門の田中冬二、草野心平、短歌部門の山本友一、俳句部門では加藤楸邨、金子兜太らがいる。